第22回展示（第1期）

大阪市立大学の学術標本

展 示 期 間　：　2009（平成21）年2月 ～

展 示 場 所　：　学術情報総合センター１階

大阪市立大学　大学史資料室

大阪市立大学の学術標本

市大の学術標本の危機

本学の学内に存在する学術標本は、今、危機に瀕していると言っても過言ではない。これらの保全という問題意識から、大学史資料室では、2007年度に、各研究科の学術標本の状況調査を行った（生活科学研究科谷研究室と共同）。すると、世界遺産とまでは行かなくとも全国区的な価値のある資料が、あまり知られずに存在していることが明らかになってきた。それらの貴重な資料が、担当教授の退職などをきっかけとして他機関に流出したり、保管スペース不足から保存・管理が不十分になる危機に直面していることも痛感させられた。

学術標本とは何か

「学術標本」という言葉は、必ずしも普及しているとは言えない。この用語は、文部科学省学術審議会の報告「ユニバーシティー・ミュージアムの設置について」（平成８年１月18日）で、大学博物館のキーコンセプトとして使われた。学術標本とは、「学術研究の所産として生成され，また研究課題に沿って体系的に収集された、学術研究と高等教育に資する資源」と定義される。そのうち、研究用の生物や大型の構築物、あるいは図書館などですでに保存・活用されている文献などを除いた有形の１次資料（オリジナルな資料）が、大学ミュージアムの対象として想定されている。相当に広い概念である。したがって、それは、「自然史関係の標本や古文書・古美術作品等の文化財に限定されるものではない」と説明される。今回、社会系の研究科からの学術資料も展示したのは、その趣旨を踏まえている。

展示の趣旨

今回の展示では、各資料に出来るだけ詳しい説明をした方がよいと考え、展示期間の前半・後半に、各４点（４資料群）ずつの資料の展示を行う。展示を通じて、各研究科・教室等における学術標本のさらなる発見（再発見）につながり、その保存・活用についての認識が深まるきっかけとなれば幸いである。

学術標本は、その大学の研究・教育活動の所産であり、大学史の重要な構成要素ではあるが、研究教育の内容に踏み込むことになるため、これまで、大学史資料室では十分に取り扱うことが出来ていなかった。この点も、容易なことではないが、少しずつ幅を広げていきたいと考えている。

この展示によって、本学関係者の学術標本への関心が高まり、将来的に大学ミュージアムの実現へと発展することを願っている。

2009（平成21）年２月
大学史資料室

展示資料について

Ⅰ　「アムステルダム・ノート」

経済学研究科に1952年から1976年まで在籍した故佐藤金三郎教授が、1969年12月から1970年3月にかけて、オランダ・アムステルダムにある社会史国際研究所を訪問し、同研究所が所蔵するマルクス・エンゲルス遺稿、とくに『資本論』関係の草稿の調査を行い、限られた滞在日数の中で、草稿の重要部分を写し取ったノート（**写真１**）。関係者の間でこのように呼ばれている。本ノートは故佐藤教授のご遺族が所蔵しており、今回はそのご厚意により展示している。また、解説文の作成を始め、展示の全般について、桃山学院大学松尾純教授のご援助を得たことを記し、感謝の意を表したい。

○　「アムステルダム・ノート」の研究史的意義

マルクスの主著『資本論』は、生前には第１部までしか刊行されず、第２部、第３部は、彼の死後、エンゲルスがマルクスの草稿を編集して刊行されたものであるが、佐藤の調査によって、マルクスの草稿とエンゲルス編集の現行版との異同が初めて明らかにされた。これは、当時の『資本論』理解に変更を迫る部分があり、学界に大きな衝撃を与えた。

その後、これらの草稿は活字化されて出版され（注）、一般に利用しやすくなった。加えて、マルクス経済学の評価が簡単ではない今日において、このノートのような仕事の意義は決して自明ではない。しかし、佐藤の研究対象への飽くことなき没入の姿勢は、時代を超えて学問研究に携わる者の心構えを教えていると言えるであろう。

（注）*Ökonomische Manuskripte, 1863-1867, in Karl Marx, Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt. II, Bd. 4, Teil 2, Dietz Verlag, 1992.

（展示資料）

・**「アムステルダム・ノート」（佐藤金三郎）**ほか

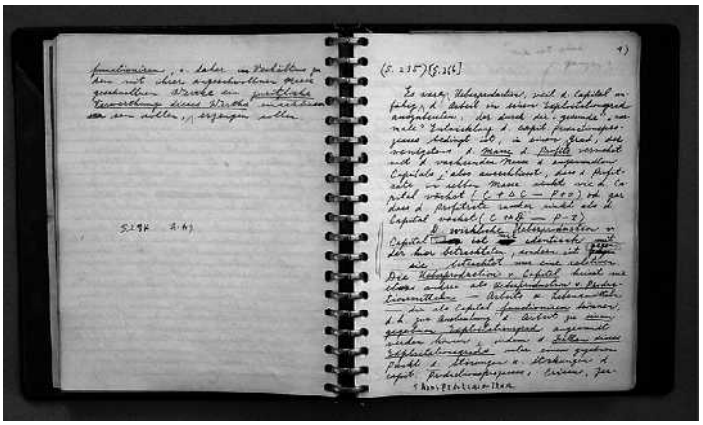

写真１　「アムステルダム・ノート」

Ⅱ　道頓堀裁判記録

道頓堀裁判とは、1965年頃、大阪ミナミを流れる道頓堀川について、大阪万博（1970年）を控えた大阪市が河川の改修工事を計画したところ、近世初期の道頓堀開鑿（かいさく）の功労者の子孫と称する人物（原告）がその所有権を主張し、国、大阪府、大阪市に対し、大阪地方裁判所で所有権確認を求めた裁判である。この訴訟は、著名な場所、対象土地価格の莫大さ、

登場する数多くの歴史上の人物（豊臣秀吉など）により、当時のマスコミにも大きく取り上げられ注目を浴びた。

本資料群（**写真２**）は、この裁判で法廷に提出された訴状や証拠資料、判決文などに加え、事件に関する関連資料や新聞記事切り抜きなどであり、この裁判で鑑定人の一人となった、牧英正本学名誉教授（在職 1950 ～ 88 年）の手元に保管されていたものである。

○　道頓堀裁判と関連資料群の意義

大阪ミナミを流れる「道頓堀」川の名は、近世初頭に安井道頓・安井道卜（九兵衛）らが、大坂城築城の際の功績により豊臣秀吉から拝領した土地に、運輸・開墾のため自費を投じて運河を開鑿したことに由来するというのが通説である。昭和 40 年代初頭、大阪市は地盤沈下による高潮被害の防止や昭和 45（1970）年に開催の決まった万博に備えるため、市内河川の護岸の嵩上げと浄化を計画したが、道頓堀川もその対象の一つであった。市は工事費用捻出のために堀の両岸を若干埋立て、その土地を売却する計画を立てたが、これに対し昭和 40（1965）年 1 月、上記安井氏の子孫と称する人物（原告）から大阪地方裁判所に、国、大阪府、大阪市（被告）を相手取り、「道頓堀川の敷地が自分の私有財産であることを認めよ」との民事訴訟が提起された（道頓堀川河川敷地所有権確認請求の訴）。

裁判自体は昭和 51（1976）年 10 月、原告らの請求棄却という判決により決着したが、この訴訟は、マスコミ的な注目度だけではなく、近世の土地支配と近代的土地所有権の連続性の有無や地券の意義など、法理的にも興味深い論点を数多く含むものであった。また、近世初期における都市大阪の形成史という観点からも興味深い内容が含まれている。

この訴訟の詳細や法律上・歴史上の意義などについては、牧英正『道頓堀裁判』（岩波新書 170，1981 年、または特装版 1993 年）に詳しい。

（展示資料）

・道頓堀裁判関連資料

「鑑定書」（牧英正）、「安井系譜」（コピー）、「平野奥野家文書」（コピー）ほか

写真２　道頓堀裁判関連資料群

Ⅲ　古生物標本

大阪市立大学大学院理学研究科・理学部地球学教室では、地球史学研究室や人類紀自然学研究室を中心にして古生物標本を用いての教育・研究が行われている。現在、地球学教室には教材としての化石標本や研究対象としての化石標本を多数保有している。それらの中には新属・新種記載されたタイプ（模式）標本も含まれ、国際ルールである国際動物命名規約等にのっとった登録、保管が強く要請されている。

○　古生物（化石）標本の意義

古生物標本は、過去の生物の遺物（遺骸や生痕）が地層中に化石として残されたものである。古生物標本は生物学や地球科学の基礎教育教材として重要であるだけでなく、生物形態・分類、生物進化、古環境、生物層位、化石資源等の研究分野において重要な研究対象である。古生物（化石）を対象とする研究分野は古生物学あるいは古生物科学と呼ばれるが、地球－生命系科学における歴史的側面を担う科学として位置づけられる。

（展示資料）

・放散虫化石を含む灰色チャート（写真３）

時代：中生代三畳紀中世中頃（約２億3000万年前）
産地：岐阜県加茂郡坂祝町勝山　木曽川河岸
備考：このチャートは古太平洋の遠洋域深海底でたまった後、プレートにのって運ばれ、アジア大陸に付加したもの。放散虫化石を取り出す前の原石。

・放散虫化石を含む赤色チャートの置物

時代：中生代三畳紀中世中頃（約２億3000万年前）
産地：岐阜県加茂郡坂祝町勝山　木曽川河岸
備考：この置物は1994年に大阪で「第７回放散虫研究者国際会議（INTERRAD VII OSAKA）が開催されたおりに作製された記念品。

・放散虫化石標本

⑴　スライドグラスに封じ込めた標本（光学顕微鏡用）
⑵　試料台に固定して金蒸着した標本（走査型電子顕微鏡用）

・クサリサンゴ（床板サンゴ）大型群体（学名：*Catenipora* sp.）**（写真4）**

時代：オルドビス紀後期（約４億５千万年前）
産地：英国南ウェールズ地方
特徴：化石の表面で、鎖（chain）をつないだような模様が顕著である。このようなサンゴが当時の海底に群がり、サンゴ礁を形成していた。
備考：化石の産地である英国ウェールズ地域は、サンゴ化石を多産することから、かなり温暖な気候に支配されていた。英国南部域は、現在とは異なり、南緯50°付近に位置していた。

・タカハシホタテ（二枚貝）レプリカ（学名：*Fortipecten takahashii* (Yokoyama)）

時代：中新世～更新世（約700万～100万年前）
産地：北海道雨竜郡沼田町
特徴：ホタテの仲間の絶滅種で、強く膨れた右殻、放射状の太い肋、大きな耳状部で特徴づけられる。

写真３　放散虫化石を含む灰色チャート

写真４　クサリサンゴ（床板サンゴ）大型群体

Ⅳ　古人骨コレクション

医学研究科解剖学第２講座では数多くの古人骨（遺跡から出土した人骨）を保管している。解剖学教室は医学部の発足当初から２講座制で、第１講座は組織学を研究課題とする鈴木清先生、第２講座（以下第２解剖学教室）は人類学を研究課題とする島五郎先生が着任された。両先生ともかつては旧京城帝国大学の解剖学教室に在任されていた。

戦後、大学をはじめとする各種研究機関や各地域の自治体・教育委員会などが主体となり、各地で盛んに考古学的な発掘が行われた。発掘された遺跡からは他の遺物とともに人骨が出土する例もあり、このような場合、専門家による人骨の鑑定が必要とされた。

島教授は末永雅雄先生や坪井清足先生、森浩一先生をはじめとする多数の考古学者との交流があり、また、倉敷考古館の鎌木義昌先生、間壁忠彦先生や間壁葭子先生とも親交があったので、このような人脈を通じて人骨の鑑定が島教授に依頼され、第２解剖学教室に集積されることとなった。昭和48年に同じく人類学を専門とする寺門之隆教授が後を継ぎ、この流れは続いた。

本教室管理の古人骨は、島五郎先生から現在まで調査研究のために搬入された人骨であるため、発掘主体に返還すべきであろうが、発掘主体での管理が困難な場合や発掘主体がすでに解散しているため、現在も本教室において保管・管理している。

この長い間に収集された人骨は総数約350箱にのぼり、中には歴史的に重要な資料となるものが多く含まれている。

○　特徴と意義

日本における古人骨の研究課題の一つに、「日本人の成立」を明らかにすることがあげられる。そのためには、縄文時代から現代までの日本人の時代的変化を、地域性も含めて分析する必要がある。また、朝鮮半島や中国大陸の資料も不可欠である。

本コレクションには縄文時代早期から江戸時代に至る各時代を通じた人骨がまとまって保管されている。これらは近畿地方のものが主であるが、岡山県や徳島県出土のものも含まれている。特に貴重なものを下記に記した。

１．縄文時代早期の石山貝塚出土の人骨や、国府遺跡出土の叉状研歯（さじょうけんし）を持つ人骨など教科書で取り上げられているような貴重なものがある。

２．近畿一円、特に大阪、岡山、徳島などの弥生時代から古墳時代の人骨資料数が多い。このことは、近畿地方人の時代による変化や同時代における地方の特徴を研究する上で非常に重要な点である。

３．保存状態の良好な江戸時代の大坂の豪商の人骨を多数有している。このなかには氏名や没年などが判明しているうえに、家系の古文書が遺存しているものもあり、人類学的な見地と歴史学的な見地からの検討が可能である。

（展示資料）

・叉状研歯（さじょうけんし）（国府遺跡 藤井寺市 縄文時代）**（写真5）**

抜歯の風習は縄文時代に全国で行われていた。叉状研歯（叉状に研磨した歯）は抜歯最盛期の縄文時代晩期に東海地方西部から近畿地方のみにみられる。一般の抜歯は集落の全員がかかわる儀礼であるが、叉状研歯は集落の長やミコ（巫女）といった特別な人物に施されたと考えられている。国府遺跡のものは愛知県伊川津貝塚と並んで有名である。

・研磨された下顎骨（森ノ宮遺跡　大阪市中央区）

森ノ宮遺跡は縄文時代中期から近世までの複合遺跡である。下顎骨は縄文時代晩期から弥生時代前期に形成された貝塚から出土した。この貝塚からは埋葬された人骨も多数出土しているが、埋葬とは関係せず単独で発見された。この下顎骨は成人のもので筋突起と下顎角、歯槽の一部を丁寧に研磨している。人骨を加工した例は日本ではほとんど見られず、特に下顎骨を研磨した報告はない。そして、その用途もわかっていない。

・刀傷のある大腿骨（写真６）

現在の大阪城公園内にあったとされる浄土宗本願寺（石山本願寺）は、石山合戦（元亀元（1570）年～天正８（1580）年）の末期に織田信長との戦いで炎上した。この時の戦いでつけられたとおもわれる刀傷は、大腿骨後面の中央に数ヵ所見られ、合戦の激しさを物語っている。

・骨折治療跡のある大腿骨（涼松（すずみまつ）貝塚 岡山県倉敷市船穂町船穂 縄文時代後期）

・朱をほどこした人骨の写真、江戸時代の豪商井阪家の人骨の写真ほか

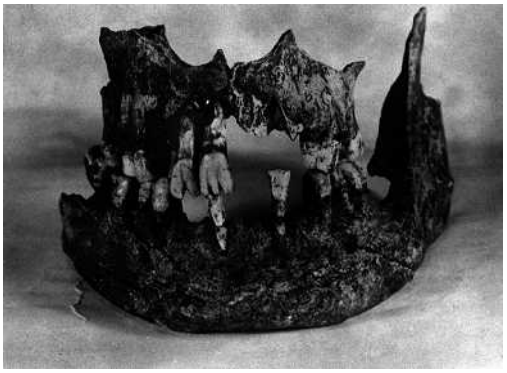

写真５　叉状研歯（さじょうけんし）

写真６　刀傷のある大腿骨

編集後記

大学史資料室の展示も今回で第22回目となりますが、「学術標本」ないし「学術資料」をテーマとする展示は、今回が初めてです。冒頭の「趣旨説明」に記したように、大阪市立大学の学術標本の価値とそれが置かれている危機的状況を知っていただき、なんとか大学ミュージアムを実現させたいという思いをこめています。

「見る」展示というより「読む」展示になった嫌いはありますが、大学ミュージアムを念頭においた展示として、ある程度の学術的水準は必要ではないかとも思っています。じっくりと「読み」かつ「見て」いただければ幸いです。

大学史資料室長（経済学研究科）大島 真理夫

ー過去の展示ー

	標　　題	期　　間
1号館		
第1回	大阪市立大学の歩み	1991.11.11～1992.7.15
第2回	クラブ誌にみる学生気質	1992.7.15～1993.1.6
第3回	学び舎を奪われた十年間　ー杉本学舎接収の苦難ー	1993.1.6～9.7
第4回	大阪商業講習所の誕生　ー市大のルーツを探るー	1993.9.7～1994.4.8
第5回	自由主義者・河田嗣郎　ー初代大阪商大学長の人と思想ー	1994.4.8～10.26
第6回	高度先進医学をめざして　ー市民と歩んだ医学部の半世紀ー	1994.10.26～1995.5.2
第7回	家政学部（現・生活科学部）の誕生　ー市立大学創設のひとこまー	1995.5.2～11.13
第8回	戦時下の大阪商科大学	1995.11.13～1996.5.30
第9回	工学部の源流　ー大阪市立都島工業専門学校ー	1996.5.30～10.11
学術情報総合センター1階		
第10回	大阪市立大学の創設と恒藤恭	1996.10.11～1997.5.28
第11回	理学部ー歴史のなかの現在	1997.5.29～12.16
第12回	市民の大学をめざして　ー寄せられた支援と独自性の創造ー	1997.12.16～1998.11.25
第13回	商学部･経済学部半世紀の歩み	1998.11.26～1999.10.18
第14回	市立大学の120年	1999.10.18～2000.12.13 （～2004.4.22 縮小して常設展示として併設）
第15回	保健体育科研究室の歩み	2000.12.19～2001.10.11
第16回	経済研究所　73年の歴史と新たな挑戦	2001.10.11～2002.11.12
第17回	学舎の記憶　ー建築で辿る大阪市立大学の歴史ー	2002.11.12～2004.4.22 （以降、「旧図書館 1/100模型」を常設展示）
ー	（「EU」展　学術情報総合センター）	（2004.4.23～8.5）
第18回	初代学長･恒藤恭の人と学問　ー新資料と絵画･スケッチで描くー	2004.8.6～2005.8.8
第19回	法学部･法学研究科　53年の歴史と新たな挑戦	2006.2.28～10.31
ー	（学術情報総合センター開設10周年記念展示　学術情報総合センター）	（2006.11.1～12.13）
第20回	「論」の遺産　ーいま、科学技術と社会のあり方を問うー	2006.12.14～2007.9.28
ー	（「萬葉学の先達」展　学術情報総合センター･萬葉学会）	（2007.10.1～12.13）
第21回	文学部･文学研究科のあゆみと挑戦	2007.12.14～2008.10.31
ー	（「EUってなに？　ーヨーロッパ連合（EU）の基礎知識ー」　学術情報総合センター）	（2008.11.6～11.28）
ー	（「南部陽一郎名誉教授ノーベル賞受賞記念展示」　理学研究科）	（2008.12.8～2009.2.6）

大阪市立大学　大学史資料室
〒558-8585　大阪市住吉区杉本3-3-138
tel 06-6605-3371　fax 06-6605-3372